

や創作活動をすることもある。愛犬の名前はふく君だ。

創作に必要なワザ

大きく書き出したり、繊細な線を表現したりするには文字の大きさによって

地域を思う作品制作

「力」を変える必要がある。作品の大きさにとらわれず、制作を続ける蒼玄さんだが、話を聞けば、まるで100mランナーであり、マラソン選手のようにも思える。

大きく描く作品は勢いや瞬発力が必要で短距離走と似ているが、小さな文字を書くには持久力が求められる。体全体を使って制作した後は「内もも」が張ることもある程、制作には体力を要する。

また、視覚から得る色の情報を生かしている蒼玄さんは「目が良いので、色の激しさや、柔らかさを受け取る感覚が強く、色のコントラストを感じることで



「3.11鎮魂と復活」は遠くから見ると波のように見えるが、近づいて見ると書き写した新聞記事が読める。

きるイメージを頭で浮かべて、視覚的なものに焼き付けていく」と語る。

蒼玄さんが愛用するのが細くて長い筆の「超長鋒」だ。細長い筆をどう使えば、太さを表現できるかを工夫している。

3・11鎮魂と復活

これまでサイズを問わず、そして新しい表現を取り込みながら制作を続けてきた蒼玄さん。震災直後、がれきの中で「紙が散乱した石巻のまちの光景が印象強く残っている。

その光景や未曾有の大災害の記憶を残さなければならぬとの思いで制作したのが2012年に東京都美術館で初発表した作品「3・11鎮魂と復活」だ。舟型をイメージして高さ3.6m、幅9mの大きな紙に全体のバランスをとりながら文字を埋めていく感覚で作った大作で、作品を離れて見ると、うねる大きな波が表現されている。近づいて見ると、その波は3・11以降の「新聞」を書き写した文字で描かれており、当時の状況を伝える記事が読み取れる。

作品との距離で見ると人の受け止め方や

と復活」を出版。これにきっかけに、作品はピカソやルノアールなど、有名な画家の作品もある米国西海岸で最も大きな美術館「ロサンゼルス・カウンティ美術館」に収蔵された。

作品に生きる 後輩たちとのつながり

書が並ぶ作品展は静かだが、それに対し、体を大きく使い書き上げる席上揮毫には別の魅力がある。蒼玄さんは母校の石巻高校書道部の講師を約5年務めており、後輩たちに手本を書いてあげること

も、生徒たちが感性を生かして表現するパフォーマンス揮毫には驚きもあるが「みんなでそろって書く」と、一体感や団結力も生まれる。

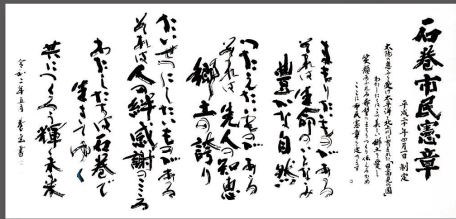
高校生は元気だねと笑顔で語り、生徒たちとのつながりも、制作に生きる刺激となっている。後輩たちの育成にも力を注ぎながら、自身の新たな作品制作に取り組み蒼玄さんの活動にも注目だ。



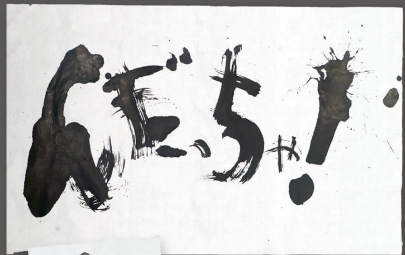
感じ方が変わる。近づけば、新聞記事を通して、当時の出来事に接することができる。蒼玄さんは「着々と復興が進む一方で風化も進む。復興へと向かう思いを見直すためにも、3・11以降の新聞を書き起こして、作品を見てもらい風化をさせないようにとの思いを込めた」と語る。

同美術館での2度目の展示の際には両横を延ばし記事も追記。幅が13mもの大作となり「3・11鎮魂と復活」の総制作時間は約1年にもなった。生まれ育った郷土を強く思う気持ちが込められた作品だ。

2020年2月には米国ロサンゼルスで開かれたアートショーに「3・11鎮魂



石巻市ささえあいセンターには蒼玄さんが作成した「市民憲章」が展示されている。



取材では迫力の「んだっちゃ！」や「質正」を揮毫してもらい、今月号の表紙に使わせていただきました。



作品「羅生門」



作品「アルゴリズム」



作品「●●●●●●」

千葉 蒼玄 -ちば そうげん-

昭和30年1月8日生まれ
石巻市井内出身、蛇田在住
(公財)書道芸術院理事
(一財)毎日書道会評議員、毎日書道会前衛書部審査委員
(一社)全日本書道連盟評議員
(公社)宮城県芸術協会書道部主任運営委員
河北書道展運営委員審査委員、宮城野書人会参与会員、本部同人、玄穹社主宰
【オフィシャルブログ】<http://chibasogen.jugem.jp/>

